童話

水谷年恵

七色に光る玉

のろちやんの本當の名は五郎と言ふのでしたが、誰も五郎ちやんと本當の名を呼ぶ者はなく、皆て、のろちやん、のろちやんと言つて居ました。

のろちやんは道を歩く時はのろ〳〵歩きます。御飯をたべる時はのろ〳〵食べます。豆細工をする時でも、折紙を折る時でものろ〳〵とやります。だから皆に、のろちやん、のろちやんと呼ばれるのです。

或時、のろちやんが濱邊へ出て、のろ〳〵と歩いて居ました。其の中に眠くなつたので、小山の上へあがつて、ころりと寢ころんで、ぐう〳〵晝寢をしてしまひました。

隨分眠つてから、のろちやんは眼を覺まして、のろ〳〵起上りました。眼をこすり〳〵、やつとの事であけて見ますと、驚きました。のろちやんの乘つてゐた小山が、海の波の上に、ぷかんと浮いて、ぷかぷかと動いて居ります。のろちやんは

「ひやーあ。」

と言つて飛び上りさうになりましたが、小山の上からひつくりかへつて海の中へおつこつてしまつては大變ですから、小山にかぢり着いて、じつとして居りました。よく見ると、小山だと思つたのは大きな大きな龜で、海邊で日なたぼつこをしてゐた龜を、のろちやんは小山だと思つて、其の上に乘つかつて、お晝寢をしてしまつたのでした。

大きな龜はのろちやんを乘せて、大波を乘越え〳〵沖の方へ泳いでいきます。のろちやんは、始めはこはいと思ひましたが、しまひには面白くなつて、

「僕は浦島太郎見たいだ。此の龜は浦島太郎の乘つた龜より大きいぞ。

僕は今に、きつと龍宮へ行つて、乙姫樣に御馳走になるんだ。」

と言つて、大威張に威張つて居ました。龜はうんともすんとも言はずに、廣い〳〵海の、波の上をどん〳〵泳いでいきます。のろちやんは、

「まだ龍宮ぢやないのかえ、早く龍宮へ行きたいなあ。だが乙姫樣から玉手箱は貰はない事にしよう。浦島さん見たいに、箱の中からけむが出て、白髮の爺いになつてはつまらないから。」とひとり言を言つて居りますと、龜は急に獨でぶく〳〵と水の中へ沈んで、何處かへ逃げて行つてしまひました。

のろちやんは龜においてけぼりを喰はされて、あつぷ〳〵と波の間で溺れさうになりました。溺れて死んでしまつては大變だと、のろちやんは手足をのろ〳〵動かして泳ぎ出しました。何時まで泳いだら、濱邊へ泳ぎ着けるのでせう。のろちやんは仕方が無いので元氣を出して泳いで居りました。

すると、何時の間に出て來たのか、大きな〳〵鰐ざめが、のろちやんの鼻の先へ出て來ました。のろちやんが吃驚して、「あつ」と言つた時には、もう鰐ざめは、ぱくりとのろちやんを一呑に呑んでしまつて居ました。可哀相に、のろちやんは龍宮へ行くかはりに、鰐ざめのお腹の中へ這入つてしまひました。

のろちやんを一呑にした鰐ざめは、お腹がふくれたので、元氣よく海の水の中を、しゆつ、しゆ

つと泳ぎ廻つて居りました。鰐ざめのお腹の中へ這入つたのろちやんは、眞暗な所へ行つて、何が何だかわかりませんが、鰐ざめのお腹の中を、のろ〳〵とさぐつて廻りました。

其の中にピカーリと青く光つた物がありました。

「おやつ、何だらう。」

とのろちやんは目ばたきをして、も一度よく見ますと、今度はピカーリと赤く光りました。次には紫色にピカーリと光りました。其の次には橙色にピカーリ。

「これは面白いね。」

とのろちやんが、又まばたきをすると、今度は黄色に光つたり、綠色に光つたり、藍色に光つたりしました。

ピカーリ、ピカーリ、其の光の美しい事、のろちやんが光りの色を、のろ〳〵と勘定して見たら青に、赤に、紫に、橙に、黄に、綠に、藍と、丁度七色ありました。

「隨分綺麗だなあ、何が光るんだらう。」

のろちやんは、其の光る物を掴んで見ました。すると、その光る物はのろちやんの眼の玉よりづつと大きい玉でした。のろちやんは鰐ざめのお腹の中で、

「これはいゝ玉を見附けた。」

と大さな聲で言ひました。

其の時鰐ざめは、海の中に張つてある網にひつかゝつてゐました。船の漁師達が、網を引あげて鰐ざめをつかまへました。

「大きな鰐ざめだなあ。」

「ばかに腹が大きいよ。何を呑んで居るだらう。」

と言つて漁師達は見て居りました。

すると、鰐ざめの腹の中で、のろちやんが、

「誰か出してよ、僕鰐ざめに呑まれたんだよう、

早く出してよう。」
と叫びました。漁師達は鰐ざめがものを言つたと思つて、吃驚してしまひました。
「やあ鰐ざめが何とか言つてるよ、これあきびの悪い奴だなあ。」
「此の腹の中に人間が居るかも知れないよ。」
「早く濱へ行つて割いて見よう。」
漁師達は急いで船を濱邊へ着けました。そして鰐ざめを砂の上へほうり出して、腹を切割いて見ました。鰐ざめのお腹の中で、もぐもぐやつて居たのろちやんは、腹の切目から眞先に片一方の手を、のろつと出しました。すると、手に握つてゐた、玉がピカーリと青く光りました。と又すぐ、ピカーリと赤く光り、ピカーリ紫に光つたと思ふと、ピカーリと橙色に光つて、ピカーリと黄色に、ピカーリと綠に、ピカーリと藍色に光りました。
漁師達は吃驚仰天、これは化物だと思つて、皆逃げて行つてしまひました。のろちやんは、のろ〳〵と動いて、少しづゝ鰐ざめの腹の中から出て來ました。のろちやんが、のろ〳〵動く度に、鰐ざめの腹ものろ〳〵と少しづつ動きました。
それを高い〳〵空の上から一羽の大きな鷲が見下して居ました。鷲は砂の上に、何かうまさうな御馳走があるやうだと思つて、大きな眼をして舞下りて來ました。そして鰐ざめの腹の所をつついて、腹の中の物を摑み出すと、又すーつと高い空の上へ舞上りました。鷲にひつ摑まれたのはのろちやんでした。
のろちやんは眼がまつて、暫くは何も見えませんでしたが、少したつと、青々と樹の茂つた山も見えます、長々と流れる河も見えます。走つて行く汽車も見えれば、帆を張つた船も見えます。家はマッチの箱位て、馬や人は蠶豆や小豆位にしか見えません。

のろちやんは面白がつて、

「萬歳々々。」

と叫んでゐました。鷲はのろちやんを掴んだまゝて、山の上を過ぎ、野の上を飛び、海の空をかけつて、何處か遠い〳〵よその國の空へ飛んでいきました。

のろちやんは、少し寒くなつたので、クシャンと大きなくしやみをしました。くしやみをした拍子に、鷲がのろちやんを放してしまつたので、のろちやんは、眞倒に下へおつこちて來ました。のろちやんは大きな森の樹の上に落ちて枝にひつかゝりました。

「あゝ危かつた。でも大丈夫だつた。」

のろちやんは樹の上から、のろ〳〵と地面へ下りました。手にはまだ七色に光る玉をしつかり握つて居りました。森の中は廣くて廣くて、どつちへ行つてもお家も無ければ、人一人通りません。其の中に日が暮れてしまひました。のろちやんは困つてしまひましたが、仕方がないので大きな樹の洞穴の中へ這入つて寢る事にしました。

とろ〳〵と眠つたかと思ふと、樹の洞穴の外を小人のお爺さんが、唄を歌つて通つて居ます。

七色に光る玉どこいつた、
王樣のおあとが繼げるぞ玉出て來い。
七色に光る玉持つて來い、
王樣のお國がそつくり貰へるぞ。

かう言ふ唄を歌つて、小人のお爺さんが通りました。のろちやんは之を聞いて、すぐに樹の洞穴を飛出して、小人のお爺さんのあとを追かけました。

「お爺さん僕が七色に光る玉を持つて居るよ。」

と言つて、七色に光る玉を見せると、小人のお爺さんは、

「どれどれ。」

と言つて、じつと玉を見つめて居りました。玉は

ピカーリ、ピカーリ、青に、赤に、順々に七色に光りました。

「おゝ本當だ、確に七色に光る玉だ、さあお前さん私と一緒にお出で、王樣がお待かねだ。」

と言つて、小人のお爺さんはのろちやんを連れて王樣の御殿へ參りました。

王樣は大層お喜びになつて、のろちやんを御自分のおあと繼になさいました。そこでのろちやんは王樣になりましたとさ。

虹の橋

A・B・C

コロンブスがアメリカ大陸を發見しないズツト〳〵前の事土人とてもあまり澤山ゐませんでした。晝でも眞暗で何が飛び出すやら分らない大きな森が一面に擴がつてゐて朝に晩に虎や猪や狼などの恐ろしい唸聲がそこら邊の土人を慄ひ上がらせてゐましたが、朝早く太陽が何千哩か果ての大空からニコ〳〵と昇つて來る時や名もない小鳥がチユー〳〵樂しさうに歌ひながら塒に歸る時や、澄み切つた空からお星樣が眞黑な森を見下ろして眼をパチ〳〵させてゐる時や又クリスマス近くになつて眞白な雪の野山へあたゝかい虎の毛皮にくるまつて土人が橇の鈴を元氣よく鳴らしながら狩に出かける時など、それは今の人には到底分らぬものでした。

その大きな森の中に鏡の樣な美しい湖があつて、そのすぐ側に大變立派なお家がございました。そのお家の中に雪姫といふ名の通りのきれいな女の子と鹿丸といふ男の子がたつた二人切りで住んでゐました。時々雪姫が村までお使ひに行くときなど行き會つた土人等はまるで女神にでも會つた樣に地面の上に面をすりつけて拜むのでした。一方鹿丸は弓の名人で那須の與一といつてもよい位

て鹿丸に見つかつたが最後どんな虎でもライオンでも生命はないものとあきらめねばなりませんでした。冬になると朝早くから鼻のちぎれ落ち相な寒い日でも橇にのつて獵をしてゐましたが誰一人鹿丸の姿をほんとうに見た者はありません。

「さあ、鹿丸さんのお通りだ、あれッ、鈴の音があんなに聞えるが……」といつて大急ぎで戸をサツト開けて見ても只眞白な雪の上に橇のあとがついてゐるばかりで一向姿は見えません。

或日の事雪姫から大變な事が村の女の子等にふれられました。それは鹿丸さんの正體の分る人は月の世界に行つて永く〳〵幸福に一緒にくらせるといふ事でした。それでなくとも鹿丸さんの正體をおがみたいといふ人が一杯なのに村中、そのふれをきいた時煮えくり返へるほどの騒でした。我先にと遠い淋しい暗い森の路を歩いて湖のお家までわざ〳〵出かけて行く女の子が、毎日引きも切りませんでしたが、みんなしほれて歸つて來なければなりませんでした。

村端に太郎兵衛さんといふ慾ン坊の爺さんがゐました、その爺さんに三人の女の子がゐました、一番末の子は一番きれいで悧巧でおとなしいので村の人から一番可愛がられてゐましたが上の二人の女の子はそれがにくらしくていつもいぢめてゐました、或日二人の女の子が森のお家へ、やはり出かけて行きましたがその時早く手傳つて首環をきれいにしてくれないといつて末の女の子にそこにあつた熱灰の桶を投げつけました、そのために大事な顔も髪も引きつり生れもつかぬ不具者となり眼も鼻も口も目茶苦茶になつてしまひましたのでそれからはみんな目茶苦茶坊主といつて見向きもしてくれない樣になりました、どんなにお爺さんや上の女の子等にいぢめられても誰もなぐさめて涙をふいて呉れる人もなく、又どんなにひどい

仕事をしてゐても誰も手傳つて呉れるものもございません。

案の定二人の女の子もしほれて歸つて來ました、今では村中の女といふ女の子で森のお家へ行かないものはなくなりました、それを耳にした目茶苦茶坊主は心の中でにつこり笑ひました、「あゝ、もう私だけです、私も行つて見ませう」と或朝誰も起きない内に、見つからぬ樣にそつと出かけて行きましに、一生懸命ですからちつども休みもしないでズン〳〵歩いて行きました、森のお家へついたのは夕方でした、丁度その時雪姫が鹿丸さんのお歸りをまつて門の前に立つてゐましたがみすぼらしい小さい目茶苦茶坊主の姿を見るなり「待つてゐました」といはんばかりに親切に迎へてくれました。

やがての事鈴の音が聞えて來ました「さあお迎へにまゐりませう、兄さんのお歸りです」と目茶苦茶坊主の手をとつて門の前へ走つて出ました、

「兄さんの姿が見えて！」

「あの橇はなーに！」

目茶〳〵な目を一杯開けてその方を見ましたとき目茶苦茶坊主の顏色がさつと光りました。

「アレ〳〵、すばらしい事、うそかしら、ほんとかしら、マアきれい！　虹の橇に金の兜！　七つの色があんなに見事に光つてゐます」といつたきりしばらく見とれてゐましたが、氣がつきました時には、今まで着てゐたボロ〳〵の着物もみつともない顏の疵も何處へか消え失せ、まぶしいばかりのお姫樣になつてゐました。そしてすぐ側に雄々しい立流な鹿丸さんがニツコリ笑つて自分を見てゐるではありませんか、あんまり不思議なのとあんまり嬉しいのとで氣が又遠くなるほどでした。やがてみんな打ち揃つて虹の橇にのり雪姫が案内役になつて今まで住んでゐた森のお家をはなれてダン〳〵高く月の世界へとのぼつて行きました。その時天からきれいな鈴の音が村の人達に聞えて來たといふ事です。（アメリカ土人物語）